

広島方言におけるアスペクト形式「～ヨル」と「～トル」

ブワシュコフスカ・カロリナ

序論

本稿は広島方言におけるアスペクト形式を概観することを目的にまとめたものであり、序論、結論および4章の本論からなる。

第1章ではまず日本語そのものについて短く記述し、また方言（英 *dialect*）の定義を紹介したのち、日本の方言の記述を行う。日本の方言の記述には使用範囲・起源などを示す。

第2章では日本の方言の分類方法をいくつか紹介する。その中で日本初とされる東條操による日本方言の分類の地図、東西対立分布や条件表現の地域差などについて述べる。日本の方言の分類方法を概観したところ、東西対立分布は一番有効な分類方法であり、似通った特徴を持つ東日本方言と西日本方言というグループに分類できることが分かった。

第3章では広島方言の概説を試みる。最初に、広島方言の使用範囲及び成り立ちを述べ、最後に、広島方言自体の記述を行う。記述には、音韻論（*phonology*）、形態論（*morphology*）、統語論（*syntax*）および敬語における広島方言の特徴について述べる。

第4章では、アスペクトを紹介し、広島方言におけるアスペクト形式「ヨル」と「トル」を記述する。アスペクトに関する点は広島で実施したアンケート調査から得られた結果を参考にしながらまとめたものである。

また、用語に関しては、「広島弁」、「広島方言」という二つの用語が使われるが、本章では「広島方言」を使うことにする。なお、文法の説明にはカタカナを使うことにする。

1. 日本語と方言

1.1. 日本語とは

日本語（*Japanese*）とは約1億2600万人の日本人（日本国の国籍を有する人々、または祖先が日本に居住していった民族）で用いられる公用語でネイティブスピーカーの人数が多い言語のひとつである（9位）。日本語が母語として使用されている地域は日本の領土となっている日本列島と日本人の民族集団が集まったアメリカ大陸、主にブラジルと米国（日本語母語話者の約1%）である。

日本語の使用範囲は日本列島に限られているため、独立した言語とみられる。日本列島は大陸から離れており、貿易だけでなく、文化と言語の交換が難しかったため、日本語は他の言語からの影響をあまり受けなかったと考えられる。その結果、起源が知られていない孤立した言語となった。ところが、1億2600万人ものネイティブスピーカーがいる言語はその起源が知られていないことは世界的にはまれである。

日本語は他の言語に比べると独立した面白い言語に見えるかもしれないが、日本語内における現象のほうが興味深く感じる。日本は山がちな島国であるため、地域によって日本語が特別な差異を持つことになり、方言が細分化したが、日本の方言の記述に入る前に、方言とは何か、その定義を紹介することにする。

1.2. 方言とは

ここでは、方言というのは具体的に何か、その定義をいくつか見てみよう。最初に、研究社の『応用言語学辞典』には方言について次のように述べられている。

方言とは、同一言語において、ある地域で話されている言語変種 (language variety) である (地域方言)。方言は非標準変種であり、標準変種と考えられている東京方言とは文法、語彙、アクセントなどの点で異なっている¹。

1.3. 日本の方言

前述したように、日本語には方言がたくさんあるが、それらがどうやって形作られたか見てみよう。日本語が地域方言に富んでいる言語であることは、その日本語が話されている領土に深く関係している。日本語が用いられている日本列島の約 70%はいわば自然のバリアである山であるため、昔、人間の移動がたいへん難しかったことだろう。全国に通じる道路はあまり発達せず交通は、不便であった。その結果、文化の普及はもちろん、当時標準語であった京都方言の影響も受けず、首都から隔たった地域では言葉が特別な差異を持つことになり、地域方言が形作られたのである。

約 200 年にわたった日本の鎖国が終わり、明治時代になると、言文一致運動が始まり、標準語を決めることだけでなく、数の多い方言を分類する必要があった。日本方言の分類方法はいくつかあるが、本稿で一番有効な分類方法は東西対立分布である。しかし、それを記述する前に、日本の方言研究の土台を築いたと言われる東條操による「東條操の方言区画」を紹介する。

2. 日本方言の分類方法

2.1. 東條操の方言区画

日本人は地域によって、日本語が異なっていること、つまり地域方言が存在していることを平安時代にも意識していたと思われる。それを証拠だてるのは 8 世紀に成立したとみられる『万葉集』巻十四に出てくる東歌 (あずまうた) である。東歌とは東国で詠まれた歌という意味で、その中に東国地方方言の語彙や文法形式の特徴が表れる歌であった。

方言が存在していると意識していたものの、それを分類する試みは 20 世紀まではなかった。明治時代と昭和時代になって初めて日本の方言を区別しなければならないと唱える

¹ 小池生夫編集主幹 (2003) 『応用言語学辞典』研究社

国語学者がいた。その学者は東條操（1884-1966）である。東條は日本全国を回り、各方言の特徴について情報を集めた。その後、修正を加えながら、得た情報を分類し、形式や語形が異なる部分に等語線を引き、分布地域を分けたわけである。図1は東條が至った最終案である²。

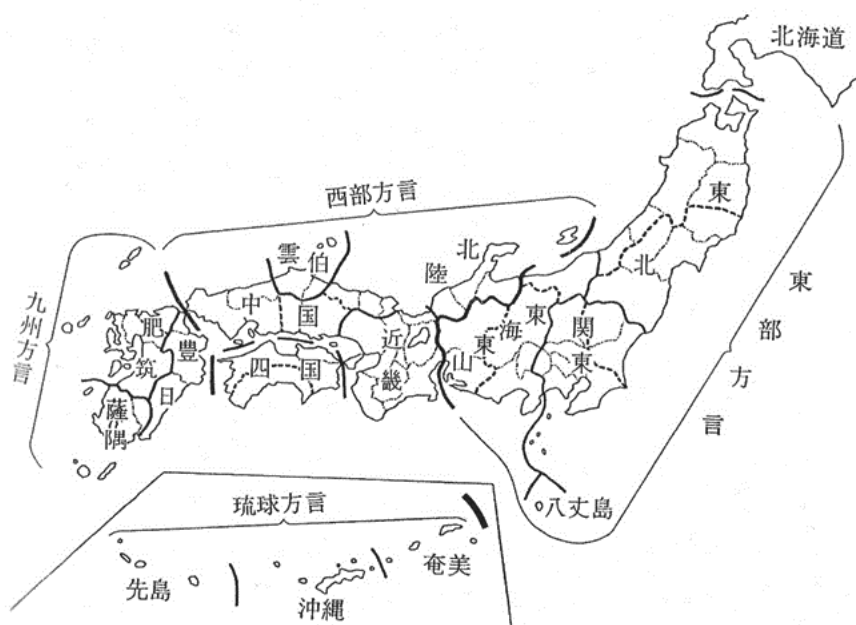


図1 東條操の方言区画 （『方言学入門』2014、9頁より引用）

図を見ると、次のことが分かる。東條はまず、日本語を本土方言と琉球方言の二つの大きいグループに分け、次に本土方言（本稿では本土方言である広島方言に集中するため、琉球方言の分布は取り扱わない）を東部方言、西部方言、九州方言の3つに分け、さらに、それを小さな方言グループに分けていくのである。

ちなみに、東條の分布を使うと、広島方言は本土方言の西部方言の中国方言であることが分かる。また、東條が本州を東部方言と西部方言、この二つに分けたのは、方言におけるアクセントに着目したからである³。

東條の区画はそれほど厳密ではないが、日本方言学の第一歩となった。また、本土方言を西部方言と東部方言に分ける等語線と東西対立分布の境界線はほぼ同じところに引かれたことから、東條の区画は東西対立分布に大きく影響を与えたことが分かる。

² 木部暢子ほか編著（2014）『方言学入門』三省堂

³ 木部暢子ほか編著（2014）『方言学入門』三省堂

2.2. 東西対立分布

次に記述する方言分類方法（本土方言のみの分類）は東西対立分布という分類方法である。東西対立というのは言語だけでなく、文化と社会にもみられるものである。本土方言を西日本方言と東日本方言に分ける等語線は新潟県西端の糸魚川市から静岡県西端の浜名湖まで引かれた境界線である。この対立の成立に日本アルプスの存在などの地理的条件が大きく影響を及ぼしていたと考えられる。

もちろん、本州の方言の中には、東西方言の特徴を持たない方言もあるということは当然ながら、東西対立分布は本土方言のさらなる分類を進めるにあたって、有効である。

東西対立分布については、柴谷方良『The Languages of Japanese』（1990）がよくまとまっている。柴谷は次のように述べている。

As for the mainland dialects, they are customarily divided into three large groups, Eastern Japan, Western Japan, and Kyūshū. (中略) in recent years, a number of dialectologists have begun to see possibility of first dividing the mainland dialects into the Eastern group and the Western group. (中略) Here we will see a number of features that form a bundle of isoglosses that divides the Eastern group and the Western group.

The items that are frequently cited in the morpho-syntactic domain include: 1) the imperatives of the vowel-final verbs; 2) the *t*-initial suffix forms of the *u*-final verbs; 3) the adverbial forms of adjectives; 4) the negative endings; 5) the copula forms; and 6) the forms of the *s*-final verbs. (中略) The formation of bundles of isoglosses by some of these forms is summarized in Map 6 from Tokugawa (1981).

このように、柴谷は徳川の図を参考に次のように述べている。

本土方言に関しては、大きく東日本方言、西日本方言、九州方言の三つのグループに分けられる。(中略) 最近では、多くの方言学者はまず東日本方言と西日本方言の二つに分けられるとしている。(中略) 東日本方言と西日本方言を分けるような特徴が多くあり、以下にその特徴をあげる。

しばしば述べられる形態統語論的な特徴は次のようなものである。1) 一段動詞の命令形、2) 辞書形の語尾が *-u* である五段動詞のテ形（連用形）と過去形、3) 変化を表すイ形容詞の「～くなる」形、4) 動詞の否定形、5) コピュラの形、6) 語幹が *-s* で終わる五段動詞（中略）これらの特徴は、徳川（1981）の図 6 に等語線としてまとめられている。

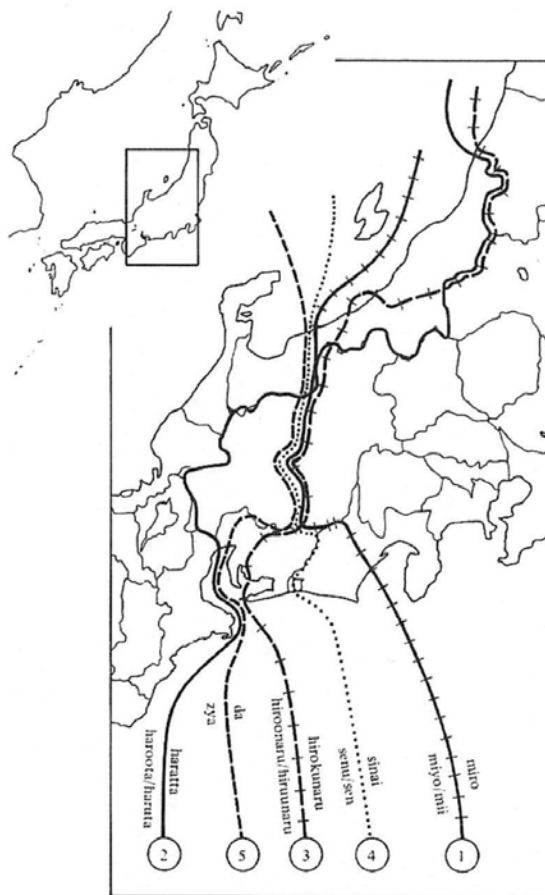


図2 方言の東西対立 (柴谷 1990、197 頁から引用)

3. 広島方言

3.1. はじめに

本章ではようやく本稿の真髄である広島方言の記述に入るが、その特徴を述べる前に広島方言が用いられている範囲、広島方言が形作られた背景を見てみよう。

広島方言は日本の中国地方の山陽地方に位置する広島県の広島市と呉市を中心に用いられる方言である。広島県のホームページによると、二つの都市の推計人口が約 141 万人であることから、それに近いネイティブスピーカーがいると考えられる。広島市と呉市以外で用いられるのは広島方言のバリエーションで本章では取り上げない。



図3 広島県の広島市と呉市の市域

広島方言が形作られたのは室町時代だと考えられる。庶民の成長による地方都市の発達や遠隔地の商品流通のために道路が整備され、地方文化の交流も活発になった。また、海上交通の発達に伴い、南を瀬戸内海に面した現在広島市と呉市が位置する地は瀬戸内海交易の要衝であった。これら交通の発達により、文化の普及と武家社会の発達と同時に、現在の広島県の地（当時安芸の国と備後の国）に京都の言葉（当時標準の役割を果たした言葉）が伝播してきた。また、安芸弁と備後弁と九州の方言のそれぞれの特徴も入ってまざり、広島方言というのが形作られわけである。こうして、四つの方言の影響がみられる広島方言は「言葉の十字路」と呼ばれている⁴。

3.2. 西日本方言としての広島方言

広島方言の特徴を見てみると、広島方言は第一に西日本方言に属すること分かる。第2章で上述したとおり、柴谷は東日本方言と西日本方言を分けるような形態統語論的な特徴を5つ挙げているが、その中の4つは広島方言にも当てはまる。その4つの特徴は：

1. 辞書形の語尾が -u である五段動詞のテ形（連用形）と過去形
2. 変化を表すイ形容詞の「～くなる」形
3. 動詞の否定形
4. コピュラの形

である。今からその特徴を標準語と比較しながら記述する。

⁴ <https://www.youtube.com/watch?v=QXu7qOtOxdc>

1. 辞書形の語尾が -u である五段動詞のテ形（連用形）と過去形

辞書形	連用形 (標準語)	連用形 (広島方言)	過去形 (標準語)	過去形 (広島方言)
もらう (モラウ)	モラッテ	モローテ	モラッタ	モロータ
会う (アウ)	アッテ	オーテ	アッタ	オータ
言う (イウ)	イッテ	ユーテ	イッタ	ユータ
食う (クウ)	クッテ	クーテ	クッタ	クータ
負う (オウ)	オッテ	オーテ	オッタ	オータ

表のように、-au という動詞の最後の 2 モーラが音便化し、さらに長音化して \bar{o} になる。同じように、-uu という動詞の最後の 2 モーラは \bar{u} になり、-ou は \bar{o} になる。ただ、「言う」については辞書形が -yuu と発音されることから、例として挙げられた「食う」のように変化する。また、標準語と同じように、連用形の語尾は -te、過去形の語尾は -ta がつく。

2. 変化を表すイ形容詞の「～くなる」形

辞書形	～くなる (標準語)	～くなる (広島方言)
早い (ハヤイ)	ハヤクナル	ハヨーナル
大きい (オオキイ)	オオキクナル	オオキューナル
軽い (カルイ)	カルクナル	カルーナル
青い (アオイ)	アオクナル	アオーナル

広島方言ではイ形容詞の最後の 2 モーラによって活用が違ってくる。標準語にあるような -ku は表れない。辞書形が -ai で終わるイ形容詞の変化を表わす形は - \bar{o} +語尾である。同じように、-ui は \bar{u} になり、-oi は \bar{o} になる。上述した三つのパターンとは違って、-kii 及び -shii で終わるイ形容詞の最後の 3 モーラは拗音化して、-kii は -kyū+語尾になり、-shii は -shū+語尾になる。また、広島弁の語彙であるスイイ (すっぱい) の -ii は音便化し、長音化して、-yū になる。

3. 動詞の否定形

辞書形	否定形 (標準語)	否定形 (広島方言)
払う (ハラウ)	ハラワナイ	ハラワン
歌う (ウタウ)	ウタワナイ	ウタワン
書く (カク)	カカナイ	カカン
泣く (ナク)	ナカナイ	ナカン
貸す (カス)	カサナイ	カサン
話す (ハナス)	ハナサナイ	ハナサン

立つ（タツ）	タタナイ	タタン
待つ（マツ）	マタナイ	マタン
死ぬ（シヌ）	シナナイ	シナン
運ぶ（ハコブ）	ハコバナイ	ハコバン
遊ぶ（アソブ）	アソバナイ	アソバン
飲む（ノム）	ノマナイ	ノマン
済む（スム）	スマナイ	スマン
帰る（カエル）	カエラナイ	カエラン
戻る（モドル）	モドラナイ	モドラン
見る（ミル）	ミナイ	ミン
変える（カエル）	カエナイ	カエン
する（スル）	シナイ	セン
くる（クル）	コナイ	コン

否定形に関しては、-nai という語尾が -n になる。ちなみに、-n という語尾は昔は標準とされており、現在は方言だけじゃなくて、標準語の硬い書き言葉（○○んばかりに等）や若者の話し言葉（知らん、分からん等）にもよく見られる。

4. コピュラの形

辞書形	標準語	広島方言
である（デアル）	ダ	ジャ
でない（デナイ）	デハナイ	ジャナイ
であった（デアッタ）	ダッタ	ジャッタ
でなかった（デナカッタ）	デハナカッタ	ジャナカッタ

表のように、コピュラ「ダ」はジャになる。否定形のデハナイはジャナイになり、さらにダッタはジャッタに、デハナカッタはジャナカッタになる。ちなみに、否定形のジャナイとジャナカッタは標準語にもよく使われている。また、標準語の「ダ」は動詞文には表れない普通形であるのに対し、広島方言の「ジャ」は動詞文につくことがある（敬語の項で述べる）。

3.3. その他の形態論的特徴

3.3.1. 終助詞「ノー」

標準語	広島方言
おいしそうだなあ	ウマソージャノー

宿題はたいへんだ（やりたくない）なあ	シュクダイ タイギーノー
わたし／ぼくはねえ	ワシャー ノー
そうだねえ	ホージャ ノー

標準語の終助詞「ね」、「の」は相づちを表したり、硬い表現をやわらかくしたりする働きがある。広島方言では「ノー」がこれらに該当する。発音は異なるものの、機能及び意味は同じとされる⁵。

3.3.2. 条件の接続詞

標準語	広島方言
そうするといい	ソースリャーエー
そうしたらいい	
そうすればいい	
言うといい	イヤーエー
言ったらいい	
言えばいい	
安いといい	ヤスケリャーエー
安かったらいい	
安ければいい	

標準語では -tara、-ba、-to の三つの条件を表す表現が表れ、それらがニュアンスの違いを持っているが、広島方言ではそれらの三つは一つの -yā の形に当てはまる。動詞の辞書形の最後の音節が拗音化し、さらに長音化する。また、最終音節に子音を含まない動詞（会う、負う、言う等）に関しては、-u の代わりに -yā がつく。形容詞の「ケ」は、標準語では -ba にしか表れることから推測すると、広島方言の条件表現には、三つの中では最も古い表現である -ba から生まれた形が残っているようである。

3.3.3. 命令形

標準語	広島方言
払ってください	ハローテ ツカーサイ
払いなさい	ハラインサイ（チャイ）
食べてください	タベテ ツカーサイ
食べなさい	タベンサイ（チャイ）
吸わないでください	スワントッテ ツカーサイ

⁵ 町博光監修、NHK 広島放送局編著（1991）『今じゃけえ広島弁』第一法規

	スイ ンサンナ (チャンナ)
吸わないで	スワントッテ
来ないでください	コントッテ ツカーサイ
	キンサンナ (チャンナ)
来ないで	コントッテ

表1 否定の命令形

「ツカーサイ」は標準語の「ください」に該当し、「トッテツカーサイ」は「サンナ」より丁寧な表現とされる。否定の「ンサンナ」の形は、標準語ではあまり見られなくなった形だが、広島方言では若い人にも、お年寄りにも使われている。また、「チャイ」は柔らかい表現として、若い女性に用いられるほか、母親が子供に対してよく使う表現である⁶。

3.4. 広島方言における敬語法

標準語	広島方言
先生がいらっしゃる	センセイガ キテ (ジャ)
	センセイガ キヨッテ (ジャ)
先生がいらっしゃった	センセイガ キチャッタ
先生がいらっしゃっている	センセイガ キトッテ (ジャ)
先生がいらっしゃらない	センセイガ キテンナイ
	センセイガ キヨッテンナイ
先生がいらっしゃらなかった	センセイガ キテンナカッタ
先生がいらっしゃっていない	センセイガ キトッテンナイ

表2 敬語法

広島方言の大きな特徴として、敬語法が発達していることが挙げられる。また、標準語では丁寧語が使われる状況でも、敬語が用いられることがある。広島方言の敬語は、日本各地の文化が発展した安土桃山時代および江戸時代に形成され始めた。上方語（江戸時代の関西地方の方言）の影響が多くある。

形式に関しては、**-te/-chatta**という肯定形、**-tennnai/-tennnakatta**という否定形、四つの形式が区別できる。表のように、連用形にそれらの四つの語尾がくる。**-te/-chatta**を用いたこれらの表現は「テジャ尊敬表現法」と呼ばれている。また、アスペクトの区別が敬語法にも現れる。ちなみに、**-chatta**には、標準語にあるような話者のネガティブな感情を表す用法はない⁷。

⁶ 町博光 (1991)

⁷ 町博光 (1991)

3.5. ト抜け現象

広島方言では、「カロリナといいます」を「カロリナ イーマス」、「いいと思う」を「エー オモウ」といった引用の「ト」を使わない表現が見られる。それをト抜け現象と呼んでいる。標準語のこういった表現はくだけた言い方だと思われているが、広島方言では改まった場合ほど「ト」を使わないことが多い。町博光は、ト抜けこそ広島方言の正しい言い方であると主張している。このような表現は、高齢者の間では盛んに使われているが、残念なことに、若者の間ではすたれつつある。

4. 広島方言におけるアスペクト

第3章では広島の特徴を短く紹介してきたが、第4章では本稿の要点であるアスペクトの記述に入ることにする。まず、アスペクトあるいは相とは何か、その定義を述べ、さらに標準語にはアスペクトという区別があるか、あるとしたら、どのようなものかを考えたい。次に、広島方言におけるアスペクト形式を紹介し記述する。最後に、留学中に実施したアンケート調査を分析し、広島方言母語話者のアスペクトのとらえ方はどんなものか、また、広島方言におけるアスペクト形式と標準語におけるアスペクト形式の比較を試みる。

4.1. アスペクト（相）とは何か

まず、日本語の言語学では大きく分けて、アスペクトの体系が二つ見られる。それらはル形とテイル形の対立で形成される「一次アスペクト」とル形と～カケル、～ハジメル、～オワル等の形によって形成される「二次のアスペクト」であるが、ここでは、東日本方言である標準語の東京方言と西日本方言である広島方言で異なる「一次アスペクト」を中心にのべる。なお、本稿における「アスペクト」というのはこの「一次アスペクト」を指すものとする⁸。

では、「アスペクトは、動詞の表す動きを丸ごと捉えるのか、その動きの中に分け入って過程を広げた持続状態として捉えるのか、展開局面のどの部分を捉えるのか、といった動詞の表す全過程のどの局面に焦点を置いて、その働きを捉え・表現するかを表し分けるものである。」⁹

「動作や変化は「開始～進行～終了～結果」という一連の過程を経て完成します。動作や変化がどの過程にあるかを表す文法的カテゴリーをアスペクトと言います。」

上述のように、アスペクトは、要するに、動作が続いているか、もう終わっているか、また既に終わっている動作の結果が残っているか、という区別のことである。

⁸ 工藤浩ほか著（2011）『改訂版 日本語要説』ひつじ書房

⁹ 工藤浩ほか著（2011）

4.2. 東日本方言におけるアスペクト形式

ここで、東日本方言とくに標準語におけるアスペクト表現を見てみる。標準語のアスペクトを指す最も一般的な形式はテイル形である。テイルは直前の動詞の種類や場面によって、進行及び結果・完了を表す。つまり、進行と結果の形になれる動詞もあれば、結果の形にしかねない動詞もあるが、以下の表に参考しながら、それらの違いを説明する。

タイプ1の動詞	進行	結果	タイプ2の動詞	進行	結果
ドアが閉まっている	×	○	葉っぱが散っている	○	○
猫が死んでいる	×	○	雨が降っている	○	○
鍵が落ちている	×	○	ご飯を食べている	○	○
ギャラリーが建っている	×	○	ギャラリーを建っている	○	○

表3 東日本方言のテイル形の進行・結果の意味の有無

表のように、タイプ1の動詞はテイルの形に進行の意味が含まれない、つまり動作や変化の終了が必須条件である。それに対し、タイプ2の動詞はテイルの進行の意味と結果・完了の意味、いずれも含まれる、つまり動作や変化の終了が必須条件でない。表に載せられた「散る」「降る」「食べる」「建てる」等は、途中の過程を表わしても、動作の終了とその結果を表しても、動詞自体の意味が成り立つ。

たとえば、「葉っぱが散っている」という文章は場面によって、「葉っぱが既に散って、地面にある」という意味、「葉っぱが少し散り始めている」や「葉っぱが今散っているところだ」という意味になる。更に、「ご飯を食べている」という文章は場面によって、「ご飯を既に食べた」という意味、「ご飯を食べ始めた」や「今ご飯を食べているところだ」という意味になる。それに対し、「閉まる」「死ぬ」「落ちる」「建つ」等の動詞は、動作や変化が完了しなければ動詞自体の意味が成り立たない。たとえば、「猫が死んでいる」という文章は、「猫が死んでもう生きていない」という意味しかない。テイル形に変えても、「死ぬ」という動作の過程を表せない。更に、「ドアが閉まっている」という文章は、「ドアが閉まった状態だ」という意味だけである。最近では、標準語でも、「閉まっている」や「落ちている」等を進行の意味で言うようになりつつあると一部の研究者が述べている。また、若者の中で、「死んでいる」などを進行の意味で言えるようになってきているが、それは冗談めかした話し言葉にすぎないことから、一般的には正しくないとされる。

ちなみに、動詞の意味に進行の形が含まれるか含まれないか、その二つのグループに分けたのは木部暢子であるが、「閉まる」という動詞からタイプ1の動詞を「閉まる」タイプと、「散る」という動詞からタイプ2の動詞を「散る」タイプと名付けた¹⁰。

4.3. 広島方言（西日本方言）におけるアスペクト形式

上で述べたように、標準語では、進行の意味を含まれない動詞と進行の意味が含まれる動詞のタイプが二つ見られるが、広島方言ではどの動詞でも結果・完了と進行、両方の意味を表すことができる。進行の意味を「ヨル」＜連用形（マス形）＋ヨル＞という形式で、結果・完了を「トル」＜テ形＋トル＞という形式で表す。

辞書形	進行の形（～ヨル）	結果・完了の形（～トル）
閉まる	シマリヨル（シマリョール※）	シマツトル
死ぬ	シニヨル（シニョール）	シンドル
落ちる	オチヨル（オチョール）	オチトル
建つ	タチヨル（タチョール）	タツトル
散る	チリヨル（チリョール）	チツトル
降る	フリヨル（フリョール）	フツトル
食べる	タベヨル（タビョール）	タベトル
建てる	タテヨル（タテョール）	タテトル

表4 広島方言の「ヨル」と「トル」の形式パターン

表4のように、標準語で分けた動詞のタイプに関係なく、進行を表すヨル、結果・完了を表すトルという、標準語の「～ている」に相当する語尾をつけることができる（～ヨルの語尾がつくと、音便化して発音されることがある）。これらの語尾により、タイプ2（「散る」タイプ）の動詞＋テイルで生じる意味の不明さは生じない。例えば、「（現在）雨が降っている」は「雨がフリヨル」、「（すでに）雨が降っている」は「雨がフツトル」といい、意味の違いを表現することができる。逆に、「花がチリヨル」は標準語の「花が散りつつある」に該当し、「花がチツトル」は、「花が散ってしまった」「すでに散った」ことを示す。このように標準語では、「～ているところだ」、「～つつある」といった継続を表す形式を用いたり、副詞を補ったりして意味の違いを表現するが、これらは純粋なアスペクト形式とは言えない。

また、テイルでは表せない内容がヨル／トルの区別によって表わすことができる。例えば、猫が病気にかかって死にかけているとしよう。この内容は、標準語の動詞＋テイルでは表すことができないが、広島方言では、この場合「シニヨル」という進行の形を使って

¹⁰ 木部暢子ほか編著（2014）

全く自然に、正しく表現することができる。さらに、「猫がシニヨッタが、元気になった」といった文も正しい文となる。

以下の表はこれまでのアスペクトに関する情報をまとめたものである。

辞書形	進行（標準語）	結果（標準語）	進行（広島方言）	結果（広島方言）
言う	言っている		イイヨル	イットル
散る	散っている		チリヨル	チットル
見る	見ている		ミヨル	ミットル
食べる	食べている		タベヨル	タベトル
飲む	飲んでいる		ノミヨル	ノンドル
落ちる	×	落ちている	オチヨル	オチトル
寝る	×	寝ている	ネヨル	ネトル
閉まる	×	閉まっている	シマリヨル	シマットル
建つ	×	建っている	タチヨル	タットル
死ぬ	×	死んでいる	シニヨル	シンドル


4.4 アンケート調査

本稿のために、2019 年 5 月から 7 月にかけて、広島方言母語話者の「ヨル」「トル」のアスペクト形式のとらえ方はどのようなものなのか、また、「ヨル」「トル」に当てはまる標準語の形式は何かを調べる目的でアンケート調査を実施した。対象者は広島方言母語話者のみで、出身地は広島市、安芸郡府中町、もしくは東広島市だった。女性回答者は 12 人（そのうち 10 代が 1 人、20 代が 1 人、30 代が 2 人、50 代が 1 人、60 代が 5 人、70 代が 1 人、80 代以上が 1 人）、男性回答者は 4 人（そのうち 20 代が 1 人、30 代が 1 人、60 代が 2 人）であった。

このアンケートは 3 つの質問からなり、1.括弧内の動詞を絵にある状態に合わせて変える問題、2.広島方言の「ヨル」「トル」の区別を説明する問題、3.標準語→広島方言、広島方言→標準語の書き換えであった。


第 1 問の絵と回答は以下の通りである。また、表記（ひらがな、カタカナ）は回答そのままである。

Q1. 絵を見て、広島弁で文を完成してください。

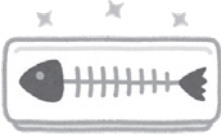
質問	回答	回答者数
	汚れとる	5 人
	汚れる	2 人
	汚い	2 人
	きしゃなくなる	1 人

動詞（汚れる）	ひどう汚れとるのう	1 人
	きしやない	1 人
	汚れている	1 人
	きぢやない	1 人
	汚れよる	1 人
	きぢやのうなる	1 人
	回答パターン数	回答者総数
	10	16 人

アンケートというのは、正しい回答というものはないが、動詞を使って、この絵を広島方言で表現するとしたら、「汚レトル」が一番代表的形となる。今回の調査でも、16 人中 6 人も「トル」を使った。そのことから、「トル」の形の優位性が分かった。最後に、本調査とは直接関係はないが、「きしやない」、「きぢやない」等、広島方言の語彙が使われたことから、広島方言は語彙的に豊富で、生きていることが分かった。


質問	回答	回答者数
 動詞（洗う）	洗う	8 人
	洗いよる	5 人
	洗タクする	1 人
	洗わにやあいけん	1 人
	あろうとる	1 人
	回答パターン数	回答者総数
	5	16 人

指示の内容が分かりにくかったせいか、16 人中半分も「洗う」という動詞をそのまま変えないで記入した。「洗いよる」という絵に一番合っているような回答は、5 人が記入した。動作が進行中であるときは、「ヨル」が一般的であることが確認された。また、「あろうとる」という回答があったことは不思議に思うが、それを書いた回答者の意図は不明だ。

質問	回答	回答者数
 動詞（食う）	食べる	7 人
	くうた	2 人
	食べた	2 人
	くうとる	1 人
	くわにやあ	1 人
	たべよる	1 人

	くう	1 人
	食べちゃった	1 人
	回答パターン数	回答者総数
	8	16 人

もっとも分かりにくい絵で、広島弁を使った回答者は3人しかいなかった。そのうち「トル」を用いた回答者は1人だけだった。また、「くうた」「食べた」など、アスペクトではなくテンスの形式で答えた回答者も多かったことから、テンスとアスペクトの区別は状況に応じて、話者の中で自動的に切り替わっているようだ。

質問	回答	回答者数
 動詞（食う）	食べる	9 人
	たべよる	4 人
	くいよる	2 人
	くうとる	1 人
	回答パターン数	回答者総数
	4	16 人

「食う」を「食べる」に変え、辞書形で答えた回答者が圧倒的に多かったが、それは絵が分かりにくかったことによるものなのか、絵を見てパッと答えが出てきたのかは不明である。ただ、6人は「ヨル」の形を使って答え、絵に描いてある動作の進行に気付いたということが分かった。

第1問については、回答パターンが多く、動詞を使わずに文を完成させる回答も多くあったことから、質問または絵が分かりにくかった可能性が高い。また、食う／食べるなど、標準語と方言の語彙が混ざってきており、どれが方言か既に意識されていないことも考えられる。

次に Q2 の結果を見てみることにする。指示は以下の通りである。

Q2. 二つの文の意味の違いを説明してください。

- ① 静かにしんちやい。赤ちゃんねよるよ。
静かにしんちやい。赤ちゃんねとるよ。
- ② Q; 今どこにおるん?
帰りよるよ。
帰ととるよ。
- ③ ドアが開きよる。
ドアが開いとる。
- ④ ああ、鉛筆ちびとるよ。

ああ、鉛筆ちびよるよ。

質問①の「ネオル」の説明としては、「つつある」「ているところだ」を使った回答者が最も多かった。また、「寝る途中」という回答も二番目に多かった。さらに、「眠りに入る」「ねにつく」などの複合語を用いた回答もあった。面白いことに、「テイル」を用いた回答は一つもなかったことから、「散る」タイプになりつつある「閉まる」タイプの動詞であることが推測される。標準語で進行形を表す「テイル」は、広島方言で進行の意味を表す「ヨル」には当てはまらないことが確認された。

それに対して、「ネトル」の説明では、「寝ている」を用いた回答者が9人だった。さらに、「すでに」「完全に」「もう」などの副詞の入った回答も多かった。また、「寝る」のような「閉まる」タイプの動詞で回答した例もあった。最後に、「ネオル／ネトル」は、ほぼ同じ意味だという回答が2つあった。

質問②の「カエリヨル」は、「ネオル」と同じく「帰っている途中」が16人中14人と圧倒的に多かった。残りの二つは「帰っているところ」「今帰っている」であったが、これは「帰る」という動詞が「散る」タイプであるからだ。一方、「カエトル」の説明には、「帰宅している」「家についている」など、「閉まる」タイプのもう家にいるという意味が含まれる動詞が回答に多く表れた。また、「もう」「すでに」なども16人中10人が回答に加えた。

質問③の説明でも似たような結果が得られた。「アキヨル」に対しても、「開いている途中」という回答が多かった（16人中7人）。また、「つつある」「ているところ」も回答の半分近くを占めた。なお、「ヨル」に動作が自動的に起こることを示す、「勝手に開いてる」という答えも表れた。「アイトル」の説明では、今まで表れていなかった「たまま」「っぱなし」という完了結果継続が多く表れた。また、「アイトル」に関して、「テイル」の入った回答も少なくなかった。

質問④の説明では、色々な回答が出されたが、やはり「テイル」は「トル」の説明で表れるのが一般的だった。さらに、「ちびてしまっている」という完了形式の加えた回答もでた。その反面、「チビヨル」を「短くなっている」、「短くなっていつている」、「短くなってきている」等、形容詞で説明する回答は半分を超えた（16人中9）。また、「チビヨル」には「まだ書ける」、「チビトル」には「もう書けない」という意味が含まれると回答した回答者が2人いた。

以上のように、「トル」の説明では、「テイル」の標準語の形式が圧倒的に表れることから、広島方言母語話者の感覚では、「テイル」というのは「トル」に当てはまる形式で、「ヨル」の意味が含まれないことが分かった。

最後に、Q3 から得られた結果について述べる。ある程度 Q2 と似たような結果がでたため、最も多かった回答についてまとめることにする。

Q3. 標準語で書いている文を広島弁に、広島弁で書いている文を標準語に直してください。

- ① 地図もっているの？
- ② 今日何していた？
- ③ 岩上さん最近やせているな。
- ④ うちの愛犬病気で、死によるよ。
- ⑤ 晩ごはん、何つくつとるん？
- ⑥ おでこひかっつとるのう。

まず、標準語から広島方言に直された回答を見てみる。①の「持っている」は、回答者のほぼ全員（16 人中 14 人）が、「モツトル」の形に書き換えた。ここでも「テイル」は「トル」に当てはまることが確認された。②の「していた」は、半分の回答者が「シヨッタ」に書き換えたが、「シトッタ」という回答も多かったことから、話者の感覚によって選択する形にゆれがあることが分かった。③の「やせている」は、広島方言では、場合によって「ヤセヨル」「ヤセトル」の両方に訳せる。その選択の自由さは回答にも現れ、「ヤセヨル」と「ヤセトル」の割合は半々であった。

次に、広島方言→標準語の結果を考察する。④の「シニヨル」は上述してきた問題に出てこなかった「死にそうです」という形式に書き換えられた。上に述べたように、「死ぬ」は「閉まる」タイプの動詞であり、「ている」を用いても「ヨル」の進行の意味を表すことができない。そこで、「死にそうです」「死にかけている」などの形式が用いられた。⑤の「ツクツトル」、⑥の「ヒカツトル」は両方とも 10 名の回答者が「テイル」の形式を選択した。

以上のことから、広島方言の「トル」は標準語の「テイル」に該当することが分かった。また、「ヨル」は「ているところ」「つつある」「ている途中」に一番近い意味があるが、「ヨル」は方言で話し言葉であるのに対し、それらは硬い、書き言葉的な表現である。最後に、方言というのはあくまでも話し言葉であり、広島方言母語話者に「それを広島方言に書いてください」と頼むと、混乱することがあり、それが本調査でも回答パターンが多かった理由となるかもしれない。

5. まとめ

西日本方言、特に本稿で取り上げた広島方言におけるアスペクトは標準語とは異なった独特の形式であり、広島方言において重要な文法現象となっている。一年間の広島での留学と本調査により、広島方言がまだまだ生きた方言であり、それを用いているのは、お年寄りだけではなく、若者にも話者が多くいることが分かった。これからも広島方言についての理解を深めていきたい。また少しだけでも広島方言で話せるといいなと思うようになった。

参考文献

- 井上和子編（1989）『日本文法小事典』大修館書店
- 木部暢子ほか編著（2014）『方言学入門』三省堂
- 金田一春彦（1977）『日本語方言の研究』東京堂出版
- 工藤浩ほか著（2011）『改訂版 日本語要説』ひつじ書房
- 小池生夫編集主幹（2003）『応用言語学辞典』研究社
- 柴谷方良（1990）The languages of Japan. Cambridge University Press
- 灰谷健二（2016）『これが広島弁じゃ！』洋泉社
- 藤原与一（2000）『日本語方言文法』武蔵野書院
- 町博光監修、NHK 広島放送局編著（1991）『今じゃけえ広島弁』第一法規
- 松岡弘監修、庵功雄ほか著（2018）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- <https://www.youtube.com/watch?v=QXu7qOtOxdc>